

# 住井すゑとその文学の里(五十四)

## ―牛久沼のほとり―

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功くりはら いさお

### 犬田卯の略年譜

明治24年(1891年)に牛久沼のほとり(稲敷郡牛久村大字城中小字南原地内)の半自作半小作農の犬田家の長男に生まれる。牛久尋常小学校より相馬町立(旧藤代町・現取手市)尋常小学校高等科に進む。同科を卒業すると、農業に従事しながら、近所に住む父親と同年代の小川芋銭宅を度々訪問。人生全般にわた

り、その指針となる薫陶を受けます。20歳から3年間、兵役義務につく。25歳の時、芋銭の世話で上京、博文館編集部に入社。そのころ芋銭より『抱樸舎』という揮毫を贈られる。一方、博文館在社中に出会った、住井すゑと結婚して田端文芸術村

の一角の借家に移る。犬田が住む町内の椎名其二宅で早大に仏文科を創設した文学博士吉江喬松による、『フランス文学』自由講座が開かれ、犬田は帝大生(東大)・早大生らに混じって熱心に受講する。そのころ犬田は、博文館を引く。プロレタリア文学者(労働者の生活を階級的立場から描く)およびその一部運動家が都市労働運動家を革命の『前衛』に位置づけ、農民を除外していたので、『農民文学』による革命(農民農地農村の解放)を目指して、『農民文芸研究会(後に農民文芸会)』を組織、これを拠点に運動を始める。大正14年(1925年)に犬田一家は杉並(現杉並区)へ移住する。近所には『蟹工船』を発表して優れたプロレタリア作家との評判が高い小林多喜二が住む。小林は、昭和6年(1931年)に結成された日本プロレタリア文化連盟(略称NAPF)の傘下に『農民文学研究会』を設け、機関誌『農民の旗』を発行、犬田の『農民文芸研究会』と対決姿勢を鮮明にする。犬田は自

分が発行する研究会の雑誌『農民』の同年6月号に『ナツプ農民文学撲滅号』と題して特輯を組み、その一方で帝国大学新聞紙上に『盲信を棄てよ、小林多喜二を駁す』との反論に出る。これより前の大正14年(1925年)に治安維持法(国体の変革(天皇制廃止)・私有財産制度否認(農地解放)を目的とする諸運動とその結社禁止を定めた)が制定され、公布される。昭和3年(1928年)には同法第一条に最高刑に死刑が科せられる改正があり、同年同法適用による大規模な全国一斉取り締まりがあつて、日本共産党関係者484人が起訴されている。昭和4年長編小説『村に闘う』自費出版。『村に闘う』は農地解放を目指して、これが治安維持法に抵触するとされ、即刻発売禁止令が出される。治安維持法の適用による特高警察監視下での農民文学活動(雑誌『農民』の発行など)の行き詰まりと、ナツプ派との論争・対決の疲れ、これらに持病の喘息の激しい発作の頻発が加わり、東京での生活が限界に達する。昭和10年(1935年)夏、犬田一家は牛久村大字城中に引き揚げる。戦後。昭和21年(1946年)から同25年の間にGHQ(連合国軍最高司令官総司令部)指令によって農地解放が断行される。

昭和26年9月の月刊雑誌『農民文学』創刊号から第7号まで、老荘思想を基にして中国古代周王朝から近代清王朝崩壊に至るまでの農民思想および理想的な農村社会について寄稿している。

昭和27年5月、犬田の発案により、『小川芋銭の芸術と人柄を敬慕する人々』の手によって河童の碑が建てられる。昭和28年7月、朝日新聞学芸欄に作家武田泰淳の『農村小説のつまらないのは、手法その他、自然主義時代から一歩も前進出来ないで、展望のひろい農業小説まで発展できないためである』という内容の評論が掲載される。それに対して、犬田は同月に同紙に『農民小説は何故つまらないか』と題し、短い反論文を書いている。

昭和26年9月の月刊雑誌『農民文学』創刊号から第7号まで、老荘思想を基にして中国古代周王朝から近代清王朝崩壊に至るまでの農民思想および理想的な農村社会について寄稿している。

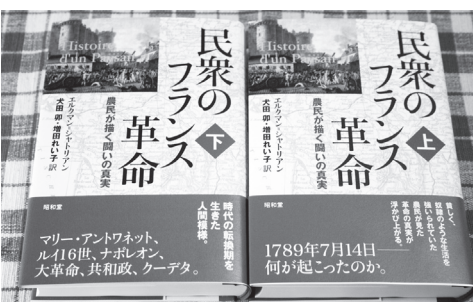
昭和27年5月、犬田の発案により、『小川芋銭の芸術と人柄を敬慕する人々』の手によって河童の碑が建てられる。昭和28年7月、朝日新聞学芸欄に作家武田泰淳の『農村小説のつまらないのは、手法その他、自然主義時代から一歩も前進出来ないで、展望のひろい農業小説まで発展できないためである』という内容の評論が掲載される。それに対して、犬田は同月に同紙に『農民小説は何故つまらないか』と題し、短い反論文を書いている。



↑在りし日の犬田卯と愛犬太郎

昭和26年9月の月刊雑誌『農民文学』創刊号から第7号まで、老荘思想を基にして中国古代周王朝から近代清王朝崩壊に至るまでの農民思想および理想的な農村社会について寄稿している。

昭和27年5月、犬田の発案により、『小川芋銭の芸術と人柄を敬慕する人々』の手によって河童の碑が建てられる。昭和28年7月、朝日新聞学芸欄に作家武田泰淳の『農村小説のつまらないのは、手法その他、自然主義時代から一歩も前進出来ないで、展望のひろい農業小説まで発展できないためである』という内容の評論が掲載される。それに対して、犬田は同月に同紙に『農民小説は何故つまらないか』と題し、短い反論文を書いている。



↑平成22年6月、昭和堂より新刊『民衆のフランス革命(農民が描く闘いの真実)』上下各巻2625円(上写真)。著エミール・エルクマン/アレクサンドル・シャトリアン、訳犬田卯・増田れい子。本書は、犬田卯の翻訳に娘二女れい子が加筆修正し、齊藤征雄東北大学名誉教授が翻訳校正をして完成させた。犬田卯が小説『民衆のフランス革命』を日本に紹介したいと翻訳をはじめ、家族の悲願でもあった「父親の想い」がずっと出版として実を結んだのだ。

おわびと訂正 広報うしく7月1日号28ページの「住井すゑとその文学の里(五十三)」の『巨匠』の写真説明に、市の編集段階で誤りがありました。おわびして訂正いたします。誤：上映シーン⇒正：上演シーン